

# 赤ん坊讃歌

津守 真

久しぶりに我が家に赤ん坊が来た。天国から直接に降りて来た孫の赤ん坊は布に包まれて、安らかに眠っている。母親の腕にしがみついて、乳をくわえている。幸せと緊張と、天国から降って来てくれたこの赤子とともに生活する幸せの中に、私はしばらく身をゆだねた。子を持つ家族のだれもが経験した同じ喜びで

ある。  
天国とはどういうものかを知りたいならば、赤ん坊を見ればいいのではないか。赤ん坊は、ひとりひとりよいものをたずさえて天から降りて来る。保育者は心の中ではだれもそう思っているのではないか。  
ひと月、ふた月と日が経つうちに、赤ん坊と共にい

られる不思議さと嬉しさとがひしひしと感じられてくる。バギーの中で、衣服をゆるやかにして、手足が自由に動くようにすると、赤ん坊は快くなる。体の姿勢を変え、位置を動かし、お日さまや風の当たり具合をかえると、機嫌が良くなる。母親や祖母が抱いていると、そのうちに眠る。男性が直接に赤ん坊とかかわれる時はまだ先である。

### 高みの光に向かつて

嵐の後、西の空に夕日が射した。赤ん坊は一筋の太陽の光を見て声をあげた。赤ん坊の感動がそこにあつた。私も思わず「ウワー」と声を出し、「キレイ」と言った。赤ん坊はニコリ笑った。私にも一瞬ハツとする感動の時だった。大人と一緒に感動するときの子ども喜び。

生後八カ月になった赤ん坊は、太陽の木漏れ日がキラッと光るのをジッと見つめて動かない。さわつてみ

たら困ったような迷うような顔をした。「キレイネー」と言ったら、安心したようにニコツと笑った。自分がやったことに皆と一緒に笑う。自分も安心して、手をあげて、ウオーと言い、靴べらを振った。空に届きそうない物を子どもは好きである。

高みの光に対する憧れは、生まれて間もなくはじまり、生涯にわたって人の心にとどまっている。

### 立とうとする努力

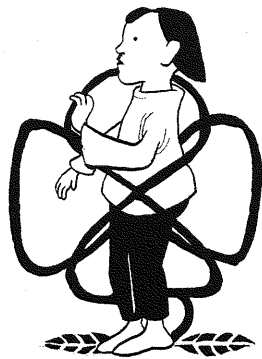
半年を過ぎた赤ん坊は座る姿勢から立とうとするが、自分の体を思うようにできない。体を斜めにし、足も斜めにして机に寄りかかる。座らせようとしても足を突っ張って立ち上がろうとするが、自分で立てない。上方にあるものに目が行く。上の方の電灯をつけると、パツと顔が輝く。立ち上がりがたくて、私に寄りかかる。私が両脇を支えると立っているが、足の裏が床につかない。足の裏で踏んばれない。足が交差して

しまう。この大変さ。これも天国から降りたばかりの人間の姿だ。赤ん坊はこうしたくても、身体がそれに追いつかない。大変なものだ。

私は若い時、乳幼児の精神発達を、客観的に年齢軸にそって羅列して研究したことがある。今回、あらためて、日常生活の中で赤ん坊にかかわったとき、大人と共通の人間の姿のはじまりがそこにあることに気が付いた。赤ん坊は、非常に早い時期から高みの光に向かって目を注ぎ、高いところに手を伸ばし、自分自身が高くなろうとする。見る、聞く、触る、動くとき、赤ん坊は単に行動しているのではなく、心が動かされている。それが子どもの成長の原動力である。その力が働くのには、大人がかかわらねばならない。かわるだけでは不十分である。子どもが感動していることに大人も感動することによって子ども自身も成長する。

### 地上を歩むようになった人間の悩みと希望

一歳を過ぎ、歩きはじめて行動範囲が広がった子どもは、他の子に近づき、その子の持っている物に触る。その手は振り払われ、はじめて他人からの拒否に出会って泣く。身体の痛みよりも、気持ちの拒否が赤ん坊にはこたえる。もはや赤ん坊をぬけだしつつある。そのとき、大人はどうするか。その子を慰め、同時に、他の子が近づいたそのチャンスを上向きに生かすようにする。それが保育者である。保育者にとっては悩みは希望に転換するチャンスである。



## 母親不在の時の幼児の表現

母親がひととき見えなくなるのも、時間と空間の中で生きる人間だれもが体験することである。けれども歩きはじめた幼児にとって、母親の不在は存在の根底にかかわる重大事である。半日でも子どもを預かったことのある祖母なら、たいがい経験しているだろう。机やソファの下に好きな自動車や電車が隠しているのを発見して、どうしてこんなことをするのかと不思議に思う。こんな風にお母さんはボクを置いて出かけてしまったとの訴えを、この遊びから聞けるかどうか。嫉のこじか頭になかったら、大人の心は子どもからはなれてしまう。母親が不在になるのがいけないのではない。辛い思いをしてその時間を持ちこたえていた子どもの気持ちに敏感になって、温かい言葉をかければ事態は違ってくる。

子どもの悩みは行動や遊びに表現されることを、私

は「表現と理解」というテーマで考えてきた。私が保育者になって実践にかかわったときに、追求してきたテーマである。フロイトやエリクソンは玩具を隠すことを、偶然の観察として済まさず、受動的に耐えるよりはかかない現実を、遊びに転換することによって能動的立場に変える力と考えた。母親不在の事態は大人も子どもひとりひとり、状況も事情も異なるから、ひとりひとりについて考えてゆかねばならない。二歳半になった私の孫は、地下鉄の階段をひとり降りて行って、階段の下で母親と再会することを何度も試みた。私の学校の子どもたちも似たようなことをする。母親不在の時間を、「帰って来たあそび」を私と繰り返すことによつて解決していったことを、以前に私は著書の中で記した。赤ちゃん、幼児、障碍をもつ子ども、いずれも連続している。それは無意味に繰り返しているのではなく、行為の文脈として大人が意識化するこ

とによつて子どもも自分の行為の意味を自覚するので

ある。

子どもと生活していると、こういう例は限りがない。

子どもは自分のストーリーを生きている

むかし、私は行動だけを見ていて、子どもの生活の中の文脈を見ていなかった。

大人だけの勝手な文脈では、自分の生活ではいいかもしれないが、子どもと一緒に生活にはふさわしくない。子どもの生活の文脈を発見してゆかねばならない。行動の断片を取り上げて、大人が勝手に善悪、優劣をきめるのではない。

子ども自身の考えに沿って想像し、私共も赤ん坊も一緒に生きるこの世界の中で、希望を持って生きられるようにストーリーをつくるのである。それにはどうするか。

## 赤ん坊神話

赤ん坊はこの上なく可愛く、善悪を超えた人間の原初的な姿であって、赤ん坊の誕生は、むかしから神話や英雄物語になって世界に流布している。釈迦もイエスも、マホメットも。私はクリスチャンなので、聖書の記事から述べる。

クリスマスのもととなっている新約聖書のマタイによる福音書とルカによる福音書は、詳しくイエスの誕生の物語を記している。イエスの誕生には両親の苦悩の時期があったが、誕生物語は羊飼いたちと東方の博士たちの賛美、「いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ」という賛美の物語である。

小さく弱い赤ん坊に人生の真実が示されるといふ赤ん坊賛美である。時代はユダヤにおける暴君ヘロデ王の時である。イエスの誕生によって政権を脅かされる

のではないかと不安と恐怖より、ヘロデ王は二歳以下の乳幼児の殺戮を命じる。偏見を人々の心に植え付け、戦争を是とする時代であった。歴史はいつの時代も悪が主流であることを示している。その時代に、二歳以下の赤ん坊の殺戮がなされた。現代に照らしてみても、他人事ではなく最も痛ましい歴史である。

イエスはその後、ヘロデ王が死んで後、ユダヤのガリラヤ地方のナザレに帰る。多分イエスが二歳と三歳の間であろうと思われる。乳幼児期の発達は民族や時代の違いに左右されるところは少ないから、私共がここで見てきた赤ちゃんに似た成長の姿だったろうと察せられる。イエスはヘロデから逃れて、父ヨセフと母マリアと共にエジプトで乳幼児期を過ごし、子どものときは幸せな生活をしたのではなからうか。高いところには輝く星をみつめ、それに向かって立ち上がろうと努力し、エジプトの大地でひたすら遊び、もしかしたら、母の忙しい時には、母の不在の時間を過ごし、再

会のテーマの遊びをしたかもしれない。「子どもたちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである」と弟子たちに言われた背後にはそのような体験があったかもしれない。その幼児期の日々の積み重ねの上に、福音書に示されるイエスの知恵と、ファリサイ派の頑さへの批判の勇氣とが育まれたのだろう。

二十世紀の後半、私共は民主主義と平和が肯定される時代を生きたことができたのは幸いだ。世界はこの方向で進むかもしれないと私共が考えたのは幻想だったのか。それは私共がいまをどう生きるにかかってきている。

復讐をではなく、愛と慈悲の心が教育の根本である。そうでなかったらどうして現在の世界のこの悪循環を断つことができるだろうか。―「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈れ」―へマタイによる福音書

五章)

(保育研究者)